

今日は... 川久保



のどかな田園風景が広がる集落 川久保

佐久穂町の東側、町役場や茂来館にも近い、川久保地区。のどかな田園風景が広がる集落です。近くを余地川と抜井川が通り、穏やかな風が吹く川久保の集落センターで、お話を伺いました。

子どもだけで開催する一大行事、“獅子舞”、“どんど焼き”

川久保集落センターは分教場跡ということで、まずは子どもの頃の思い出からお聴きしました。川久保では冬場の一連の恒例行事は子どもだけのお祭りとして、準備から終わりまで全て小学生が取り仕切るものだったそうです。秋が深まり、家々の田畑の収穫が終わる12月頃になると、子どもたちはワクワク胸を躍らせました。高学年は日暮れになると親方（6年生）の所へと集まり、藁紐作りや獅子舞の練習などの子どもだけ（男子だけ）の時間を過ごします。各常会の親方をトップに、1～5年生それぞれの持ち回り分担があり、年下の子たちへの指導も全て子どもの組織で行われました。どんど焼きのために必要な大木も許可を得て子どもたちだけで伐採し、何日もかけて引いてきたというエピソードには、驚きです。

「小学生たちが（向原の栃久保地区から）木を切って、運んできた。1回じゃ山から持って来れねから、途中で置いておいて、次の日曜日また行って、2回か3回でやっと引きつけて（引っ張って）きただよ。（やぐらを）たてるのもね、親には手伝ってもらわない。子どもっきりで、ちゃんと組んでね。」と、親方を経験された邦夫さん。やぐらが完成したら、それを他の常会の子たちに崩されないように、当日まで見張り当番で泊まり込んだそうで、これもまたビックリです。

年始になると、獅子舞で数日かけて歌って踊ります。今まで練習した成果をここでたっぴりと披露したら、大人たちから、おひねりをもらえました。

1月7日のどんど焼きでは、やぐらを燃やし、燃え残った薪や炭を売って歩きました（火付けに重宝されたそう）。「集めたお金をみんなに分配し、それを小遣いにしたんだ。地域のお祭りの出店で、お菓子や玩具を買うのが楽しかった。」と、前年の聴き取り時にもお話し下さったのが、印象的でした。



話し手 宮川 邦夫さん
宮川 勝子さん
佐藤 精栄さん
佐藤えみこさん
竹内 達朗さん
新海 広 さん

川久保地区の特徴は、4つの常会がある程大きな集落であることです。獅子舞、どんど焼きも常会ごとに分かれて活動していたため、獅子舞の歌や踊りも全て異なるものでした。戦時中に、それぞれが統一されて引き継がれたものの、現在はテープで録音された歌を流し、それに合わせて歌っていると話してくださいました。

時代とともに子どもの人数が減ってしまったとはいえ、子どもが主役のお祭りは今なお続いています。特色ある地域の伝統が大切に守り続けられていることが、みなさんの誇りです。



川久保の風景写真

いつの時代も楽しい、学校帰りの寄り道

分校には2年生までの児童が通い、3年生からは本校（佐久中央小学校）へ通いました。川久保から本校までの道のりは、約2km。子どもの足でも、30分程で行くことができましたが、帰り道はたっぷり1時間かけて、道草をしながら帰ったそうです。

勝子さんは通学路の畑々中で、よく桑の実を食べたと懐かしそうに話してくれました。えみこさんのお子さんが小学生の頃も、清水が湧いているところでサワガニを捕ってくるから、毎日運動着が真っ黒だったと笑います。どの時代も、やっぱり道草は楽しいのでしょうか。それにしても、当時の豊かな自然が感じられるエピソードです。

広さんも、「畑や木になっているものを子どもが採っても、今ほど大事にはならない、そんな時代だったよね。」と語ります。みなさんの年代は違っているのに、地域の中で子どもたちが過ごす柔らかな空気感が同じく伝わってきます。

魚屋さんの厳しい冬と、鯉のあらい

精栄さんが持ってきてくださった何枚かの昔の写真には、えみこさんと共に営んでいた魚屋さんの写真がありました。「昔は川んここに池（いけす）を作ってたね。冬になれば凍るから、つるっぱしで氷を割ってね。年末になれば、鯉を100kgくらい売ったよ。（業者が）大きいのはっぱり送ってよこすでしょ。骨が硬いから大変だったよ。」と精栄さん。「お店の中に池があったんだよ。」とえみこさんも付け加えます。

年末になると、たくさんの人がお店に鯉を買いに来ました。また、自宅で育てた鯉をお店に持ち込み捌いてもらったり、あらいにしてもらったりすることもあったそうです。えみこさんは、「あらいって言われると、冬は（寒くて嫌だったから）う～ってなった。」と、苦笑い。あらいは、鯉をお湯に通した後に流水でしめるんだそうです。

子どもの頃は、どの田んぼでも鯉を飼っていて、秋の収穫にはそれを食べることができました。当時は魚を食べる機会も少なく、楽しみだった、と話すのは邦夫さん。

「ずっと昔は、（鯉を）売りに来たんだよ。“鯉の子”つつてね。それを、入れ物持って買いに行くわけ。200匹くらい買って、田んぼのあちこちに少しずつ入れる。秋になると、それが10cmくらいになるから、それを開いてさ。いろりの火棚へ刺しといて。お正月には、それを煮て（食べるんだ）。」

精栄さんにも伺うと、「鯉こく」にするのは3年ほど育てた鯉なんだそう。田んぼで育てた鯉は保存食にしていました。



佐藤さんご夫婦の営んでいた魚屋さん。お店の前のリアカーを引いて余地の方まで行商にも行きました

昔はよく食べた、“おざら”、“すいとん”、“こねつけ”

鯉から広がり、昔の食文化についての話題に。一番変化したことは、お米がたくさん食べられるようになったことなんだそう。

「お米も水田も、もっと少なかった。戦後の開田で、桑畑や畑だったところが田んぼになったから。昔は1年中（お米を）食べられる家っていうのは、あんまりなかったんだよ。」と邦夫さん。

当時は収穫量が少ないだけでなく、家族の人数も多かったもので、なかなか満足にお米を食べることができなかったようです。

そこで、よく食べられていたのが、小麦料理。畑で作った小麦を水車で粉に挽いて、1日に1度は小麦料理を食べていました。今までの聴き取りの中でも、“おざら（うどん）”を食べたというお話をよく聴いたのですが、こういう訳なのかと腑に落ちました。

川久保のみなさんも、“おざら”、“すいとん”、“こねつけ（残ったご飯、小麦粉をよく混ぜたものを一口大にして揚げ、砂糖醤油をつけたもの）”などを食べていたそうで、勝子さんは今でも時々“皿焼き”または“せんべい焼き（ニラやキャベツなどの野菜を小麦粉に混ぜ、焼いたもの。チヂミに似ている）”を作るそうです。

「勝子さんの皿焼きは美味しいのよ！」と、えみこさんはにっこり。皿焼きは、小さく切って田んぼ仕事のおやつとしても持って行きました。

今と比べると決して裕福ではない時代のお話でしたが、暮らしの中にも、様々な子どもたちの楽しみがある様子をお聴きすることができました。今回お話を伺ったのは、90代、80代、70代と世代が違ひみなさんでしたが、それぞれ共通の話題もあり、和やかな集まりとなりました。みなさんのお話を聴いた後には、心もほかほかに。川久保のみなさん、素敵なお話をありがとうございました。



お話を聴かせていただいたみなさん

聴き手	川嶋 愛香	文章	川嶋 愛香
	天田 かよ子		天田 かよ子
編集		デザイン	櫻井 麻美
			西澤 ユキ

みどりちょう

翠町と人の暮らし



翠町は、旧佐久甲州街道にあり、柳町の隣にある集落である。信号を通り過ぎると、右側に不思議なものが目に入る。鉄柱の上に、小さな屋根を形作った置物がある。昔、旅籠だったので、その目印かもしれない。



旅籠を示す置物

倉沢治貴さんが子どもの頃、旧佐久町公民館（現在の柳翠区民センター、さらに歴史をさかのぼれば、旧栄村役場があったところ）を中心に高野町旧道（旧佐久甲州街道、この辺りの人は旧佐久甲州街道は旧道と呼び、羽黒下駅前、東町商店街の道を新道と呼んでいる）沿いにはいろいろなお店が軒を並べていたという。文房具屋、駄菓子屋、下駄屋、酒屋、豆腐屋、米屋、雑貨屋、魚屋、金物屋、床屋、等々。「子どもがすげー（すごく）いた。毎日30人くらいの子もたちが、今の区民センターの広場に集まってきて、鬼ごっこ、かくれんぼ、缶けり、三角ベース野球で遊んでた。まだ、テレビのある家が4軒しかなくて、夕方、『月光仮面』が始まる時間になると、テレビを見せてくれる家に40人くらいの子もたちが上がりこんで、ぎゅうぎゅう詰めになって見てました。」昭和30年頃だという。治貴さんはテレビのある家の子と仲良くなり、一緒に遊んであげてから、『名犬ラッシー』、『七色仮面』、『少年ジェット』など、週末になると見せてもらってたという。



治貴さんの祖父母（茂七・ちか夫妻）

「その頃、※パッチンが流行ってた。パッチンには3つ遊び方があった。四角の枠を地面に描いて、相手のパッチンを枠外にはじき出す。相手のパッチンを裏返しにする。相手のパッチンの下に自分のパッチンを潜り込ませる。勝つと相手のパッチンを取れるので、真剣勝負。周りの地区からも来て、パッチンの取り合いをした。」

子どもの頃の食事について尋ねると、「食事は、ひとりずつお膳があって、囲炉裏を囲むように行儀よく座って食べたものです。座る場所は決まってて、俺はいつも親父の傍で箸の持ち方で小言をよく言われた。食べ終わると、白湯とタクワンで茶碗とお椀をきれいに洗ったものです。それからお膳をかたづけた。」

最後に、おじいさんとおばあさんの写真を見せてくれた。二人とも和服を着て、キチンと正座をしている。おじいさんは立派な山羊ひげを生やしていた。簡素な中に、凛とした雰囲気漂わせていた。「痩せてるでしょう。親父も痩せてました。食事が違うんでしょうな。質素な食生活だったと思います。でも長生きでした。じいさんは96歳、ばあさんは94歳、親父は98歳、母親は105歳まで生きてました。」おじいさんの名前は、茂七さんといい、北沢の大石棒を見つけた人である。

これからやってみたいことは何ですかと聞くと、「栄保育園の年長さんたちの米作りを手伝ってます。お田植え、稲刈り、脱穀まで、一緒にやり元気をもらってます。

それと、昔の集落の生活など、方言を使って紙芝居にしたいと思っています。あまりおじゅうく（生意気）なことは言えませんがね。」



茂七さんが見つけた大石棒

※パッチン…メンコのこと

高見澤泰夫さんは、生まれてからずっとこの翠町で暮らしてきた。一度も町外に出たことがないという。「子どもの頃の思い出といえば、みんなと同じで、放課後は近くの山に入って遊んだことや天神祭では寸劇をやったり、味噌を炊く釜で甘茶を作ったりした。どんど焼きでは、勝手に人の山に入り込んで、木を切り出してやぐらを組んだ。持ち主に見つかってこっぴどく怒られた。燃え切らないで残った木を細かく刻んで、薪としてお店に売って、お金をもらい、みんなで分けた。私はそのお金で学用品を買った記憶がある。」その頃の子どもは遅しかったとお話を聞いて思った。

「十日夜では、わら鉄砲を作って、宿岩まで行って、喧嘩して逃げて帰って来たこともある。一番の思い出は、『泥棒、巡查』遊びだな。私は小さかったので、泥棒役をやらされた。わら縄で縛られて、水車小屋に半日入れられた。怖くて、怖くて、泣き通しだった。そんな子どもだけの遊びもいつのまにかなくなった。」

泰夫さんは22歳の時、体育指導員になった。当時としては珍しいほど若い指導員だった。若い頃からスポーツは何でも好きだったという。「私の周りのスポーツ好きの仲間たちと早起き野球を佐久町に作りました。9チームで始まった早起き野球が最盛期は24チームまで増えました。当初はみんなで一緒に野球を楽しむ親睦の意味合いが強かった。苦労したことと言えば、グラウンドが無かったことです。中央小学校のグラウンドを使ったのですが、狭いグラウンドだったので、ボールが民家の屋根に当たったりして、その都度謝りに行きました。その後、総合運動場ができたので、思う存分野球を楽しむことができました。体育指導員として次に取り組んだのが、ママさんバレーボールを作ることでした。結婚して子どもを産んでしまうと、なかなか外に出る機会がなかった。そんなママさんたちが外に出るきっかけを作りたい。最初は、分館対抗ママさんバレー大会を企画しました。この大会をきっかけに、バレーボール好きの女性たちが自由にチームを作って、試合をすることができるよう協会を設立しました。最盛期には20チームが週2回のリーグ戦をするまでに盛り上がりました。早起き野球やママさんバレーボールを作った私の思いは、佐久町に生まれた若者たちがこの地域に根付いてくれることでした。」

泰夫さんは、青年団の団員として文化活動、スポーツ活動に一生懸命取り組んだ。県の演劇大会で優勝したこともあるという。高見澤敏光（元県議）さんが『三郎の仕事』という題名の脚本で農家の生活を書き、大道具、小道具もすべて手作り。みんなが一緒になって1つのものを作り上げる。そんな場にいることが好きだと言う。

「今、84歳ですが、70歳になった時、レストランを閉めました。初めからそうしようと決めてました。28年間やって来たので悔いはありません。若者たちが集まれる場所だったことに満足してます。人生、人のために生きてきたという実感があります。」

高見澤一宏さんの家の前に、鉄柱の上に小さな屋根の置物が乗っている。珍しいので、あれは何ですかと、尋ねると「その下に、看板を吊るしてました。ここは、祖父の時代まで旅籠だったんです。」と言って、看板を模した図柄の木版を見せてくれた。「この木版で紙に刷って、配ったそうです。今という広告ですね。」この木版には、『商人諸国 御定宿 本屋万平』と彫られてある。「江戸中期から昭和初期まで旅籠をしていたようです。その後、下宿屋に代わり、近くの小学校の先生を下宿させていました。常時5～6人の先生がいたことは、覚えています。きちんとお膳を並べて食べていたのを覚えています。」

一宏さんは生まれは翠町だが、父親が教員だったので、勤務地の関係で佐久市の小・中学校に通っていた。でも、夏休みや冬休みには、翠町の実家に帰って来たので、近所の子もたちとよく遊んだという。「一番の思い出は、夏休みに帰って来た時、近所の子もたちと学校のプールに行ったこと。先生も別の学校の児童と知っていながら、手の甲にハンコを押してくれて、プールに入ったことがあります。」

「アルフィー（音楽グループ3人組）の高見澤俊彦さんは、親戚になるんです。NHKのファミリーヒストリーという番組で、取材に来て初めてわかったんです。まさか、自分の家と関係があるなんて知らなかったの、本当に驚きました。6代前の先祖同士が、兄弟だったらしく、それを確かめるために取材でお墓に書かれた先祖の名前を調べていました。2時間ぐらいインタビューを受けたんですが、実際に私が映って話をした場面は2、3分でした。」放映後は、会う人、会う人にテレビを見たよと、声かけられたそうだ。

「高見澤家は江戸時代から続く家柄で、子どもの頃祖父から、昔は殿様が泊まったことがあると聞いた覚えがあります。定かではありませんが、脇本陣だったかもしれません。かなり古い脇息や刀掛け台があるので、、、。ただ、古文書のような記録は今は確認できていません。」

一宏さんは、今年から柳翠区の区長をしている。「区長として取りまとめることが多くて、忙しい毎日です。今は、町への地区要望書の取りまとめ、諏訪神社の松が松枯れ病で伐採したので、そのあとに桜とサワラを植える植樹祭の取りまとめ、祇園祭、敬老会等々。区長として責任ある立場にいますので、その責務を果たしていきたいと思っています。」



前列左から3人目が泰夫さん（文責 西村寛）



こぼれ話やその他記事を公式noteにて公開中！

佐久穂 集落 note



発行・問合せ | 佐久穂町役場 総合政策課 政策推進係
TEL.0267-86-2553 〒384-0697 長野県南佐久郡佐久穂町大字高野町569番地

